

浄土

monthly JODO

1

2016
January

浄土新年号通卷

900
号

あの一休禅師が

法然上人を讃える七言絶句を遺していた

法然伝聞活如来

法然上人は生き仏であつたと伝え聞きます

安座蓮華上品台

いま上人は浄土の蓮華の最上座に坐っておられるのです

教智者如尼入道

智慧あるものも無知の人のようであれと述べられている

一枚起請最奇哉

一枚起請文は最も奇跡の書であると思うのです

一休宗純『狂雲集』

浄土

2016/1月号 目次

法然上人その心	佐藤良純	2
連載 法然上人のお言葉⑱	梶村 昇 英訳 河西良治	6
眞の浄土	椎尾辨匡	8
連載 会いたい人 ドナルド・キーンさん	関 容子	16
連載 響流十方	袖山榮輝	24
連載 東日本大震災の被災地を訪れて⑨	成田淳教	28
連載小説 渡辺海旭⑥⑤	前田和男	32
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	44
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

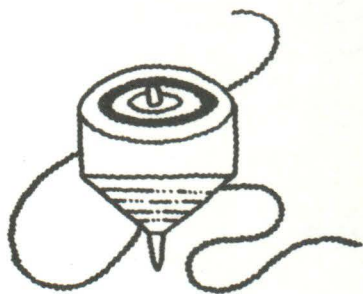
今年の表紙

写真家●鬼海弘雄

山形県寒河江市生れ。法政大学文学部哲学科卒。

1973年より浅草で人物を撮り始め今も続けている。ほかにインド、トルコ、街など長いスパンのテーマを持つ。

土門拳賞（2004年写真集『PERSONA』）の他多くの受賞歴を持つ。文筆家でもある。写真集、エッセイ集多数。



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人 その心

月刊『浄土』通巻900号を迎えて

法然上人鑽仰会会長

佐藤良純

当会の機関誌、月刊『浄土』は、今号を以て通巻九〇〇号を数えることが出来ました。最大の偉人である法然上人を讃仰し世に広めたいとの思いから、昭和十年五月に創刊され、先輩諸兄のご努力の元、戦争をも乗り越え、最近の世の中の流れか、月刊誌の出版がどんどん廃刊になる中でも、何とか続けてこられましたことは、支えていただいた読者の皆様のお力と、心から感謝御礼申し上げます。

南無阿弥陀仏と口に出して称えれば、死後だれでもがお浄土に生まれるとの教えを説いた法然上人は、鎌倉時代、今から八百年前に岡山県にお生まれになりました。父上は地方の役人でしたが人の恨みをかい、ある晩いのちを奪われます。最後のことばは「怨みは怨みを生み、永遠に尽きることがない。報復をするな」とのいましめでした。お釈迦さまが説かれた言葉の中にもまったく同じものがあります。

父の言葉を忠実に守って、上人は全ての人の悩みを救う教えを求めて出家し、比叡山に向かいます。当時比叡山は八宗兼学の府、つまり仏教学すべてを学習できる唯一の学校の役割を果たしていました。この地で法然上人はすべての経典、注釈書を三回も読まれたと伝えられています。また木曾義仲が京都に乱入した日だけ聖典を見なかったとも記されています。しかしどうしても納得できずついに中国の善導大師のお言葉「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住座臥に時節の久近くこんを問わず、念念に捨てざるもの、これを正定の業しょうていごうと名く。彼の仏の願に順ずるが故に」の一文に心をうたれ、新しい浄土宗を開かれたのでした。特に「弥陀の名号を念ずるとは心の中で思うのではなく、口に出して申す」とされたのが特徴です。ヒンドゥー教では精神統一の行として聖なる音「オーム」を唱えることを強調しますがそれと共通するものです。

法然上人は、その御遺訓『一枚起請文』に「もろこしわが朝に、もろもろの智者たちの沙汰しもうさるる、観念の念にもあらず、また学問をして念の心を悟りて、もうす念仏にもあらず」と、ただ一心に南無阿弥陀仏と称えることを記されています。お寺を建てたり無理な修行をする必要もなく、ひたすらお念仏を称えよとのお言葉はひろく一般の人々の心をつらえました。それまでの伝統的仏教の人々からの圧力にも屈することなく進まれた法然上人の強い意志がうかがわれます。

法然上人は人々の日常生活のなかでの悩み、疑問、困ったことに短い言葉で答えをされました。高貴な人、一般の人、男性、女性、若い人、年よりの人などです。

例えばお念仏を申しているのに色々腹の立つことばかりの人に対しては、人の心はいつも揺れ動いており、それは悪いことに違いないが一生懸命に心を集中するように努めてゆけばやがて心が休まると答えられています。坐禅をする禪宗の方にお伺いしたところ、やはり初めは雑念がおこるが、勤め励んでいるうちにいつのまにか無念無想の境地に達するものだとのお答えが返ってきました。

またお念仏を称える回数が多いのは分かるが、もし若くして亡くなった場合救われないのかとの問いに、お念仏を多く称えることは良いことだが、百念でも十念でもただの一念でも往生できると説き、また、もし父母より先に若くしてこの世を去るのは罪かとの問いに、残念なことではあるが世の中にはそのようなことも在り亡くなった人のためにお念仏、供養することにより救われると説いておられます。中でもお酒を飲むのは罪かとの問いに、良くは無いが世の中のものというけながしておられるのが目立ちます。もっと大切なことがあるよと言われているような気がします。

それ以来、お念仏の流れは多くの困難をのりこえて人々の心のよりどころとなってきました

した。ただ時の移り変わりにより根本は変わりませんがその考え方はいろいろ変化が見られたり、説き方も工夫されてきています。

弁榮上人（一八五九—一九二〇）の創設した、観仏に力を入れる光明会のお念仏には問題もありますが、多くの信者さんもおられます。跡見女子学園を創立された跡見花溪先生は毎朝、仏様を見奉ったと記しておられます。

椎尾弁匡先生の「共生の思想」は經典の「願共諸衆生 往生安樂国」がんぐしよしゅじう おうじやうあんらくこく 皆ともに極楽に生まれようとの考えに基き、その方法としてお念仏を説かれます。この運動は一人一人が救われるとともに多くの人々が一諸に極楽に生まれようとするところに特色があります。昭和三年八月に示された共生の主張には次のようにあり、

1. 私共は同信協力を通じて、成就衆生じうじゆしゅじやうの大道だうだうを辿らんとするもの、国境も民族もえらぶ所ではありません。

2. 私共は同事（各自の本分を尽くしつつ世間と協調すること）の聖訓を奉じて、分担協調の二辺を完うまことせんとするもの、貧富も男女も隔つる所ではありません。

共生の思想は建築家で東海高校出身の黒川記章氏（故人）の著作（英文も含め）により、日本をはじめ世界に広く知られることとなりました。Coliving, Symbiosis の語を外国の人々も用いています。

歴史的にみて、たとえば自然に対する見方が東洋と西洋では違います。西洋では自然と人間を相対するものとみて厳しい自然環境を征服することによって、人々は幸せになると考えました。夜の闇を人工的な電気で明るくすることがそのよい例です。東洋では自然と人間はそのまま、仲良く暮らして行くのがよいと考えています。

我々はこれからもみんな仲良くお念仏の生活を送りたいものです。

合掌

ご法語

問うて曰く、心のすむ時の念仏と、妄心の中の念仏と、その勝劣いかん。答えて曰く、その功德ひとしくして、あえて差別なし。…問う、一声の念仏と十声の念仏とは…智者の念仏と愚者の念仏とは…、答えていわく、仏の本願にとづかば、すこしの差別もなし。…このたび輪廻のきずなをはなれる事、念仏にすぎたる事はあるべからず。

(念仏往生要義抄)

現代語訳―尋ねて言うには、心の澄んでいる時の念仏と、妄心が起こっている時の念仏と、その勝劣はいかがでしょう。答えて言うには、どちらもその功德は同じであって言うほどの差別はない。…問う、一遍の念仏と十遍の念仏とは…、智者の念仏と愚者の念仏とは…、答えて言うには、仏の本願に基づいてい

法然上人の お言葉

Honen Shonin's Sayings

When asked which was better, the nembutsu uttered in a serene mind or that uttered in a distracted mind, Honen answered that either of them would give you the same merit without any particular difference. When asked which was better, the nembutsu uttered once or ten times, the nembutsu uttered by wise or ignorant people, he answered none of the nembutsus would give you any difference in merit because they were all based on Buddha's Original Vow. Now there is nothing better than the nembutsu for the purpose of getting free from the ties of the transmigration cycle.

(Nembutsu Ojo Yogi Sho)

Commentary

In this saying there is the expression "getting free from

るので、少しの差別もない。…このたび輪廻の絆から離れるには、念仏に勝るものはない。

解説

ここに「輪廻の絆から離れる」とありますが、これが仏教でいう救いということだと思えます。私たちが生死を重ねているこの世もあの世も、迷いの世界であつて、そこを私たちは車の輪のように、いつまでも回つております。その絆から脱却することが救いです。そのために仏教はいろいろな教えを説いております。

日本仏教が比叡山で説いてきたことは、戒律を守り、心を定め、真理を学び、悟りを開いて、輪廻から離れようということです。それは素晴らしい教えですが、とても凡夫には実行できるものではありません。それよりも再びこの迷いの世界に戻るこのない阿弥陀仏の極楽浄土に往生することです。それには阿弥陀仏が誓われた念仏を申すことより優れた教えはありません。念仏は弥陀のお力ですから、それは一遍であらうが十遍であらうが、智者であらうが愚者であらうが、問題ではないと法然上人は説いています。

その通りだと思つたのですが、私たちは事が起こるとすぐに、ありもしない自力に頼ろうといたします。そしてカール・ブッセの詩ではありませんが「涙さしくみ帰るきぬ」というようなことを繰り返しています。何度も繰り返して、どうしようもない自分に懲りたとき、初めて大いなるものに、すべてをお任せするほかないと思つたのではないのでしょうか。それが念仏だと思います。

the ties of the transmigration cycle". I think that this is the meaning of Buddhist salvation. Both this world and the other world in which we continue the repetition of birth and death are ones of illusion and we keep on going around the two worlds like wheels for ever. Our salvation is that we can cast off these bonds and become free. For that purpose Buddhism preaches a variety of doctrines.

What Japanese Buddhism had been preaching in Heizan was to adhere to the precepts, to cultivate mental concentration, to learn the truths, and, by achieving spiritual enlightenment through these practices, to become free from the transmigration cycle. It is true that these are marvelous teachings, but they are difficult for ordinary people to carry out. Much more practicable is for them to go to the Paradise, i.e., the Pure Land of Amida Buddha where they will stay never going back to this world of illusion. For that purpose there is no teaching better than the utterance of the nembutsu. Honen preached that it depended on Amida Buddha's Power so that it did not matter whether it was uttered once or ten times or whether it was uttered by wise or ignorant people.

It must be true, but the instant that something occurs, we try to rely on our spurious powers. As is also expressed in a poem of Carl Busse's, we repeatedly "come back with our eyes bathed in tears". Is it not until we repeat such behavior and at last feel how powerless we are that we realize we have nothing else to do but leave everything to something great? I think this is the nembutsu.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

アーカイブス ● 月刊浄土ライブラリ 昭和10年5月創刊号

眞の浄土

椎尾辨匡

一、 大 自 然 の 動 き

物を以て観る人には物の羅列が世界となるが、それは切れぎれである。力を以てして見る人は相引き合ふ蛛網の如きも尚外から縛つた連鎖に過ぎぬ。心として扱ふものには縁慮し相應する、その内面の合不合によりて正邪美醜善悪があるこれを求心的に内に探ぐれば主觀の明暗であるが、遠心的に外に展ぶれば客觀の淨穢である。即ち淨土は單なる物や力の世界でなくして心の世界であるが、心でも遠心的に求めらるゝ客觀的の淨界である。實に物と心とが對立するのでないから物を捨て、心を取るのでもなく兩者を調和したのでもない。淨き心を以て物を淨からしめたのでもなく、特に淨く見直したのでもない。物と思はれたもの自體が淨いのである。これ即ち天地の一切相が最も自然にその趣く所に趣ける姿であるから、法性界とも大自然界とも云はれるものである、が、決してそれは但理でも觀念でも磊塊たる萬物の集積でもない。實に生々と活き轟々と伸び何等の缺漏もこだわりもない無漏無障の世界である。何處までも覺め覺め進み進みて息まざる生命界である。これ涅槃界とも佛國とも眞實土とも云はるゝ、所以である。

二、 報土

法性無爲涅槃の世界として認められる、眞の淨土は何人も能く造り得るものではない、全く大自然の姿であるが、それが姿としては具體的な事實であるから色相もあり物質でもあり方相を云ふこともでき、個々差別する。そこには意識も情意の力作も、因果も縁報も考へることができる。故に法性の世界、常寂光土と呼ばれる淨土が連續せる果報として報土でもあり、又不完全なる有漏差別の考へ方に對應して現はる所には應化土、假設土でもある。既に報土として情意の世界であり、行爲の成績として認めらるゝが故に行爲の主體が考へられる、それは報身である。言ひ換れば自然の中に人が現はれるので、人が自然を造るのではない、然し人も自然の進みで自然と別なものでない。只自我意識を恣にする時は不自然なる迷執の世界が成立する。人がその本然を完うする時、自然が人の世となり、尊き國家社會となる、自我が強い處には有漏報土出で本然法性に順ふ處には無漏報土成立する。吾等の世界前者で諸佛の成就せられた所は後者である。自我を恣にして自然を往服し浪費

三、 の阿彌陀 佛國陀

したり天物を冒瀆し暴殄する人々の所には豊かなる國家を滅亡することは東西皆然りである。之に反して我が國の如きは岩山と海とで田地もなく産物も饒かでなかつたが、祖先以來克く勤め克く守りて、天物を培ひ育てたから偉大なる天祐を得るやうになつた。その自我個在を恣にして亡び行くものが有漏果報であり、無私奉公の赤誠により守り育つる無窮の國運は無漏報土である。君民一點の私心なく協心戮力、正を履み中を執り邁往息まざれば古今を貫ぬき中外に通ずることができる。

我が國民精神が淨化され高調される所に國運隆々として無窮性を強め來るやうに、無漏の淨心正行によりて金甌無缺の淨土が莊嚴される。これが諸佛の淨土であり千態萬様各々微妙な精華が咲き立つやうである。これ等の衆美を鍾めて完うせるは阿彌陀の淨土である。

その淨土は無量壽經によれば四十八願に成就せる所で、第一には勞働（獄道）と盲働（畜生）と不働多欲（餓鬼）となき世界なりとする。即ちいや／＼働く者や分らずに働くもの、働かないで欲を恣にする者なく、皆正しき思想を以て歎喜し奉行するものばかりの世界である。それは彌陀の力の充滿し成就せるが爲である。阿彌陀の力は無量である。無量の力は離れて別に存するのではない、能く一切を成就して眞實の生命を完うせしめるもので、所として存せざるなく時として働かざるはない。これが無量見とも無量壽とも徒衆眷屬無量とも無量相とも無量幢とも名つけられる大徳である。無量光とは無邊に無礙に如何なる處をも明るくする御光である。煩惱妄念の間も瞋恚忿怒の焰も等しく淨められ明るめられる、衆生の心想千萬無量なるに一々が淨化され明光されるを無量光と申すのであり、第十二の願でもあり、それが現に成就して一方を照らして念佛の衆生を攝取することは三經等しく説く所であり、最も容易に體驗する事實である。

月影のいたらぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ。と歌はれたる、光明は遍く十方の世界を照し念佛の衆生を攝取せられるので、愚痴の儘に南無阿彌陀佛すれば明るき彌陀の智慧光に照らされ、貪欲不淨の中に南無阿彌陀佛すれば淨き

清淨光に澄淨される。何處にも照益し給ふ如く、何時でも増上し護念し生き往かせる限りなき御いのちであるから無量壽でもある。我等が努力するのではない、この御いのちによりて脚下に如來の一步を歩ませて頂くのである。

時は今、處あしともその事に打ちこむいのちとはの御命、我等の偏執分別を以てすれば親子も兄弟も相反くもので、情なき痛ましのものながら等しく如來の慈光に照らされ、御命の攝理を蒙り、一人も漏らし給はぬ所が衆無量である。已に往生し今往生し當さに往生する差別はあれども、それは見る見ぬの違いで、月は一切を照し如來は一方衆生往生の願を成就せられて居る。それらの相の大小美醜も、行ふ事の遅速も農工も簡ふ所はない、悉く照らし生かし給ふが阿彌陀に在します。この阿彌陀は一切を遍照し、十方に圓通し給ふが故に、今此に我等もこのすがた、此の事に頂くことができる。それは本願の極意只南無阿彌陀佛に在るが故に念佛の中に成就せられる。

稱ふれば吾も佛もなかりけり唯南無阿彌陀佛の聲はかりして

彌陀は一切處に一切衆を生かし成就し給ふ御力であり、その壽光満足せる世界が阿彌陀の佛國である。現在說法として

四、 淨土の 現在

は一切が覺醒され活躍させられ眞實生命に更生せしめられる姿であり、壽光無量としては何時でも何處でも攝化する御力であり、今此に明るく生きられる事實である。

現在說法であり遍照月光であり壽相無邊であれば淨土の現在に明確なるに拘はらず、それが疑はれるは把握の道を過つからである。

具體的事實なりとて色相物質に固執するは淨土の淨を失ふものである。さりとして唯心性の清淨に凝滞するは淨土の土を見ざるもので

ある。吾等の唯物唯心、定量差別の盲執が月を見ず淨土に遠かるので其距離正に十方三千世界十萬億土である。一たび目を觸るれば山も河も悉く彌陀の妙色身であり、鳥の音も水の音も等く說法の和雅音である。然し自然觀たり法性觀たる限り眞の淨土は宗うされぬ。又觀經などに説くよそ行きの氣持で精神を統一して觀る極樂の寶地寶池寶樓寶樹や彌陀の玉

座、影像、眞身や眷屬たる觀音勢至諸往生人等を廣略にみる見方もある、がこれも余所事であり陪觀者にすぎぬ。眞の淨土は之を體驗し味讀するものでなければ接受親炙されない。親炙せぬから眞實に徹到することができない。これに親接するは吾れ見、吾れ聞き吾れ行ひ、吾れ生くる事實の中でなければならぬ。それは餘所行きの造り事でなく、自然の素直な生活事實でなければならぬ。これ釋尊が凡夫日常の散心生活の中に極樂を味受せしめ往生を教示せられた次第である。然るにそれが大衆的社會善にせよ、小乘的獨修善にせよ、皆彌陀の本願でなく、又釋尊の説意でない、二尊の本意に従ふ善導の釋文では只一向專稱彌陀名に見出さるる淨土が眞の淨土である。

連 載

会いたい人 関 容子

特別編



コロンビア大学入学の頃(16歳)のキーンさん。写真提供：公益財団法人ブルボン吉田記念財団 ドナルド・キーン・センター 柏崎

大人の休日倶楽部会員誌(平成27年8月号)の表紙に書齋で寛ぐキーンさんのにやかな写真が掲載され、巻頭インタビューに続いて、九月に新潟県柏崎市で開催される講演会の案内が載っていた。

キーンさんとの接点は、三十年以前に遡る。歌舞伎座で誰方かに紹介され、そのころ出たばかりの『中村勘三郎楽屋ばなし』(昭和60年、「勘三郎」は十七代目のこと)をお送りしたら、程なく「大変、面白かったです」というお葉書をいただいた。日本文学研究の大家であるキーンさんが、日本語の読み書きに長けておいでなのは承知していたが、太い万年筆で書かれた味わいのある大きな文字を眺めて、つくづく感じ入った覚えがある。

その後、芝居やコンサートやオペラの会場で度々キーンさんをお見かけしたが、あれは『椿姫』のときだったか、私が文章と人生の師と仰ぐ丸谷才一先生のお供をしていて、偶然お席が近かったキーンさんの肉声に親しく

ふれたことがあった。

今回、講演会の案内を見てどうしても行きたいと思っただが、休日倶楽部会員二百名を抽選で招待、とあって、聞けばもう千人近い応募があるという。講演会には「ドナルド・キーン・センター柏崎開館2周年記念」という副題がついていた。そこで数年前に古浄瑠璃復活上演が柏崎であって以来、おつきあいのある吉田眞理(公益財団法人ブルボン吉田記念財団理事でドナルド・キーン・センター柏崎の学芸員)さんにお願いしてお招きを受けた。センター二階で主催者側とのお昼の会食にも同席させていただき、折を見て、あの『椿姫』のときに……とご挨拶した。

キーンさんはすぐに向き直って、

「ああ、あのとき、丸谷さんと。あの方はわたしが(坂口)安吾賞をもらったときに、わざわざ会場までお祝いに来てくださったしました。どうしてわざわざ、と思いましたが、それからしばらくして亡くなりましたので、



「大人の休日倶楽部」2015年8月号の表紙を飾ったキーンさん。

あれはお別れに来てくださったんだ、とあとでわかりましたです。発想と書くものが、総てユニークな方でしたね」

となつかしみ、しばらくしてまたこちらを見ると、テーブルの上に指で「才」の字を書きながら、

「この、才という字は、片仮名のキの字によく似ておりますでしょう」

と話し始められたが、何か別の用事で中断され、ついそのままになってしまった。もしかして横書きにすると「キーン」と「才」は共通するところがある、と続けられたのかもしれないが、違うかもしれない。

それから二か月後のこと。私は柏崎のキーン・センターを訪ね、吉田眞理さんの紹介で新潟市在住の英米文学者、北嶋藤郷さんからお話を伺う機会を得た。

北嶋さんは安吾賞の授賞式が新潟で開催されるのに先立つ、東京での発表パーティーに

出席していた（平成22年10月、ホテルニューオータニ）。

「私が東京で学生生活を送っていたころ、研究社という出版社で原稿取りのアルバイトをしていたことがあります。当時の『英語青年』の編集長は有名な外山滋比古さんで、私が丸谷さんの何の原稿でしたか、あのころの神楽坂のアパートまでいただきに上がったことがあるんです。」

その思い出がなつかしくて、何となく丸谷さんの近くにいたら、こんなやりとりを耳にしました。キーンさん、おいくつになられましたか、そうですか、三つ年長でいらっしゃる。わたしはあなたの背中をずっと見つめ続けて今日まで来ましたが、どうやら三年は追いつけないことになりそうで……と、あとはつきり聞き取れませんでした。周囲に人がいて、キーンさんも何のことかと思いがら結局そのままにされたようですが、あとで思いあたられたんだと思いますよ」

北嶋さんがホテルのタクシー乗り場まで丸谷先生をお送りすると、車の中から、かつて文壇三大音声（あとは井上光晴と開高健）と称された大声で、「有難う」と元気に挨拶されたという。

「安吾賞とは生きざま賞である」と銘打たれたこの賞を、それまでに野田秀樹、野口健、瀬戸内寂聴、渡辺謙などが受けていて、キーンさんは五人目の受賞者。北嶋さんがお持ちくださった安吾賞のリーフレットには、丸谷先生がお祝いの言葉を寄せていた。

それは、安吾の『墜落論』でも『桜の森の満開の下』でもなく、『信長』こそ天才の書いた傑作、という出だしで、なるほどキーンさんのご指摘通り、本当にユニークで意表を突いている。つまり、安吾は本質的なところで歴史家で、キーンさんの得意の業は、もともと、世界と人間の歴史的な把握。この賞を受けるのにまことに筋の通った人達、と結んでいた。

北嶋さんがパーティーで聞き耳を立ててくださっていたおかげで、知的巨人お二人の別れの場面が鮮やかに甦ってきたのだった。

ニューヨーク生まれの دونالد・キーンさんが日本国籍を得て日本人「鬼怒鳴門（きどなうもん）」となつたのは平成23年3月の東日本大震災の直後のこと。その後、柏崎市にDonald・キーン・センターが開館し、そのころ柏崎市名誉市民にもなっている。なぜ、お住居のある東京の北区ではなくて、新潟県柏崎なのか。誰しもが疑問に思うところだろう。

その発端は平成18年3月、（株）ブルボン社長夫人の吉田眞理さんが知人に誘われ、新潟砂丘館で上原誠己（せいき）さんが演じる義太夫を聴いたことだった。

この上原さん（のちにキーンさんのご養子になるのだからすごい）の経歴がちよつと変っている。新潟、弥彦山麓の上原酒造の次男として生まれ、長じて東京外語大の仏文科在

学中に人形浄瑠璃、文楽の舞台を観て、特に重厚な太棹^{ふしざお}三味線の音色に魅了される。卒業と同時に国立劇場の文楽研修生となり、その後、文楽三味線弾き鶴澤浅造として、二十五年間、大阪文楽座で活動した。

しかし体調を崩して故郷へ帰り、しばらく兄の会社を手伝っていたが、いったん舞台の醍醐味を知った身は、それで納まれるはずがない。ささやかな地元再デビューを砂丘館で果たしたわけだが、その確かな芸と情熱を披露するのにこれではあまりにお気の毒、と眞理さんは考える。

それから早くも約半年後、柏崎市の旧跡、飯塚邸で二回の公演が実現し、延べ三百人近い観客の大喝采を受けて、上原さんは感激する。これを企画し実行に移したのは、もちろん眞理さんだった。

ここまですが上原さんにとつてのポップ・ステップだとすれば、この演奏会からわずか六日後のジャンプは、実に思いもよらない行動

だった。単身上京し、新宿文化会館のドンالد・キーン講演会に直行、アポなしで控え室を和服姿で訪ね、今後の自分の進む道を相談している。

上原さんのひたむきな思いはキーンさんにまっすぐに通じ、一か月後の正月には東京のキーンさん宅訪問の許可を得て、初詣のお供まで仰せつかる親密さになっている。これは並々ならない出会いと言える。

このとき上原さんがキーンさんに提案されたのが、かの古浄瑠璃『越後国柏崎・弘知法印御伝記』の復活上演、というテーマだった。

上原さんが新潟の人であることから、キーンさんが約四十年前も前に一読し、そのままになっていたこの古浄瑠璃を即座に思いついたのだった。

しかしこの浄瑠璃本が上原さんの手に渡るまでには、まだまだ長い物語がある。

ここで登場するのがキーンさんの古い友

平成22年10月、安吾賞受賞式後の記念写真。中央がキーンさん。



人、早稲田大学名誉教授で日本近世演劇研究者の鳥越文蔵氏。キーンさんが、三十九歳のとき、日本の演劇研究のために一年半の間東京原宿に住むことになった。十一歳年下の鳥越氏は、そのころ早大の若き学究だったが、恩師群司正勝氏の命により、キーンさんと近世の勉強会を持つようになった。

次は鳥越氏の文章。

「その中、謡曲を習いたい、古風な流儀が望ましいと。能楽評論家に頼んで桜間道雄師を紹介してもらった。私も一緒に習えと云われるので膝を並べて謡っていたのは思い出深い。手解きてほどの一曲を上げて二曲目に『熊野ゆや』を習いたいと云い出された。それは幼稚園から一氣に大学へ進むようなものだそうだが、道雄師は受入れて下さった(「キーンさんのこと」この件りは笑ってしまった。キーンさんは少年のころから成績優秀で、「飛び級」をくり返し、コロンビア大学に入ったのは十六歳のときだというから、飛び越えるのは得意の

お家芸なのだろう。

しかしこの特別のお稽古は、キーンさんの母の病気でニューヨークへ帰国のために中断される。人間国宝、桜間道雄師はその晩年に、このときのことをなつかしんで、キーンさんは母上の病気があった、同様なテーマの『熊野』を望まれたのだろうね、と鳥越氏に語ったというのも風雅な話だ。

キーンさんは再度来日して、いろいろ世話になった鳥越氏をどうにかしてアメリカで勉強させたいと思う。そこがまた何ともあたたかい。奔走の結果、アメリカではなくイギリスのケンブリッジ大学が受入れてくれることになる。キーンさんのこの親切が、やがて鳥越氏の大英博物館における『弘知法印御伝記』の台本——日本には現存しない幻の一冊発見につながったのだが、その後の調査で詳細がわかってきている。

この古浄瑠璃の作者は江戸孫四郎で、貞享2（1685）年、日本橋の説教座で上演さ

れていた。その台本を口絵の面白さに惹かれてオランダ商館付のドイツ人医師エンゲルベルト・ケンベルが入手し、日本を離れる際に長崎から船底に積んで海外に持ち出したものだった。

『越後国柏崎 弘知法印御伝記』は、鳥越氏の帰国後、古典文庫「古浄瑠璃集 大英博物館本」として翻刻出版された。大変なお仕事だったと思う。しかも奥付には、昭和41年3月発行で、「非売品」とあった。

その一冊をキーンさんが所蔵し、ちゃんとそのことが頭の中にあつて、四十年もの時を経て上原さんへと手渡すことができたのは奇跡と言える。

しかし受け取った上原さんを初めとする越後国柏崎の人たちの上演に向けての涙ぐましい努力の数々にもやはり物語はあるのだった。

（この項つづく）

我今浄土宗を立る意趣は、凡夫の往生を示さんが為なり。

法然上人「浄土立宗の御詞」より

今、私、法然が浄土宗を開く目的は凡夫が浄土へ往生することを示すためです。
凡夫の往生

二〇〇〇前から一九〇〇年前だという弥生時代中期のものが三つ。一八〇〇年前から一七〇〇年前のものだという同じく弥生時代後期のものが一つ。拙寺のすぐ裏の、先年、閉校となった小学校跡地から竪穴住居の遺構が掘り起こされた。長野県庁にほど近いこの小学校の西側には「県町遺跡」あかたまちが眠っていて、一帯が埋蔵文化財包蔵地に指定されている。この跡地に県立大学の施設があらたに建設されることとなり、発掘調査が実施されたのである。

平成二四年度末（二〇一三）に閉校となった後町ごしろ小学校の創立は明治六年（一八七三）。一四〇年間、拙寺とは道路を一本隔てただけのご近所だった。校舎の取り壊しも、発掘作業も、毎日の生活のなかで見続けてきた。パワーシャベルが跡地を掘り起こし、そのうち小さなシャベルを片手にした作業員の数が増え、いくつか一段と深く掘り下げる場所が見られるようになった。そこに遺構があるのかもしれない。

サッカーゴールや朝礼台はどの辺りだっただろうか。すべてが更地となり、体育館に響くシューズの足音も、私の部屋まで飛んできそうだったプールの水しぶきも、数年前の日常がいつの間にか地域の歴史となっていた。

わが町「後町」はかつて「後庁」といったそうだ。鎌倉時代に国庁が移って

きたことに因む町名である。地元紙の報道によれば、旧後町小学校の体育館の跡から弥生時代のかめやつぼといった土器や石の矢尻が出土しており、校舎の跡からは奈良時代から平安時代にかけてと見られる遺構も発掘されつつあるという。古い町だとは思っていたが、この辺りは幾重にも人の営みを積み重ねてきた歴史だらけの土地だった。小学校の創立、閉校も、長い長い歴史のほんの一頁。この地面の下には、まだまだたくさんさんの歴史や物語が埋まっているはずだ。

仏教では、この世の生類というものは、覺りを得られぬまま何万何億回も生き死にを繰り返しつつ今に至り、そのなか私たちは有り難くも、今、現に人の身を受けているとする。何万何億回もの迷い深き人生の積み重ねの上に今のこの自分がいて、私たちの人生の下には、私たち自身でさえ知らないままの、遙か遠い過去の自分たちが埋まっている。今のこの人生は、代々の「私」という長い歴史を背負った存在の最新の一頁。地球の表層のようなものだ。

生き死にを繰り返す迷い深き者を仏教では凡夫という。凡夫には煩惱深き者、覺りの境地に至り得ない者、そうしたレッテルが貼られている。そして、そういう存在が私たちであるともいう。でも、迷える凡夫の人生にだって忘れたくない大切な出会い、思い出、物語がある。

法然上人が浄土宗をお開きになったのは、私たち凡夫であっても阿弥陀仏の極楽浄土に往生が叶うということを、世に明らかにするためであった。

紋切り型に言えば、極楽は凡夫であっても目指すべき覚りの世界。ところが凡夫には覚りが何だか分からないから目指しようもない。でも、阿弥陀さまは凡夫の極楽往生を自らの願いとしておられる。凡夫の往生を叶えるということは、私たちのこの人生の奥深い所に埋まっている、私たちでさえ知らない遙か遠い過去の自分たちの大切な出会い、思い出、物語、人生の営みのすべてをそのままにして極楽の住人にするということだ。私たちは極楽浄土に持ち込んだ遙か遠い過去の自分を一つ一つ丁寧に掘り起こし、ご縁を結び直しながら「浄土の再会」を果たしていく。そこにはきっと法悦があるはずだ。

阿弥陀さまが凡夫の極楽往生を叶えるのは、「凡夫だからといって無駄な人生など一つもない」と、言ってくださりたいからに違いない。年頭と本誌九〇〇号に当たり、浄土宗開宗の精神をあらためて味わいたいと思う。

(袖山榮輝)

東日本

大震災の被災地を訪れて

9

特別編「最近の災害に思う」

東京世田谷感応寺住職
関東ブロック浄土宗青年会理事長

成田淳教



避難所のペットスペースとなった駐輪場。

平成二十七年九月、関東・東北豪雨は一万六千棟以上の家屋に床下、床上の浸水や全半壊等の被害をもたらし、多くの方が避難所に入られました。

そうした中で私の知人が、避難所にペットを連れて行くことができない方々のために、ペットの預かりボランティアを始められ、現在は常設のシェルター活動をするためのNPO法人を立ち上げる準備中だそうです。今号はその方に伺った話から書かせていただきます。

関東・東北豪雨で大きな被害を受けた常総市では、避難所でのペットを飼う場所を各避難所の駐輪場のスペースにしたそうです。これは、衛生面や生活上の理由で、人が生活するスペースと一緒に暮らすことはできないからです。確かに衛生面上や設備上仕方のない理由であつたにしても、首都圏などの動物愛護家からはインターネットなどで、ペットと一緒に避難所に入れないことについて批判の

声や投稿があつたとのことでした。

また、こうした話をしている中でこんなお寺への提案を伺いました。

地方の寺院は首都圏に比べれば広い敷地の所も多く、災害時に被害を受けなかったご寺院があれば、その境内の一角にペット用のスペースを設けていただき、ご近所で避難された方々やお檀家様のペットの一時預かりをしていただけると、安心して預けられるのではないかと、という提案でした。加えて、災害とは関係ありませんが、保護動物の譲渡会等の会場としてご寺院に協力いただけると有り難い、会場となることで多くの人も集まるので、これはご寺院にとつても良いことではないかと、この提案もありました。

お寺がペットという動物をどう捉えるかは、各ご住職によって色々な想いがあるとは思いますが、私の寺では、ペットのご供養や霊園を設けたり、保護した猫の里親探しなどもしていることもあり、この二つの提案に大

変興味を持ちました。

確かに、日頃からペットと関わっている寺院であれば、災害時に預かるにしても、飼い主の方の不安も軽減されると思います。寺院が地域に貢献するひとつの方法であることは間違いないかと思えます。

さて、先程述べたように私の寺ではペットのご供養もしているため、ペット関係の事業をしている知人が少なくありません。そのうちの一人に、動物関連業種に就く人々を養成する専門学校の理事長がいらっしゃいます。その方からの依頼で、平成二十四年四月に私がその方と、日本愛玩動物教会の方、動物愛護協会の方と四名で対談をしたことがあります。場所は日野市の東日本大震災東京都動物救援センターで、平成二十三年十月に作られた施設でした。

この施設は、東日本大震災で被災され、東京都に避難し、ペット同居不可の物件に入られた方々のペットを預かったり、被災地のシ

ェルターに保護されていたペットを移動させて新しい飼い主を探すことを主目的とした施設です。活動内容はペットたちの飼育、ペットへの医療提供、預かり動物の返還や譲渡などです。

その対談の中でペットと暮らしている方へ伝えたいメッセージとして何度も言われたのは、災害時などに避難する場合は、可能な限り最初の避難時にペットと一緒に避難してほしいとのことでした。例えば一旦避難所に行ってから後で迎えに行こうとしても、火災が起こっていたりして行けないケースもあったり、一部損壊した家屋からペットが逃げ出してしまい、探し回っても見つからなかったというケースも多くあるからだそうです。

本誌六月号にも書きましたが、浜○カフェ（仮称）で伺った仮設住宅でペット同居可の所は不可の所に比べて、避難生活を始めてすぐの頃から避難所全体の雰囲気明るかったとの話もありました。

日本では現在、ペットを飼育している家庭が5割を超えていて、その大多数が室内飼育です。災害時には当然、人命第一ですが、その後の生活や心のケアを考えた時に家族の一員として暮らしているペット達のこととも考えておかねばならないと思いますし、そうした災害時のペット問題に役立てる寺院が増えることはいいことです。

平常時から、非常時に自分の寺では何ができるかを考える時、そして近隣のご寺院と相談し役割分担的な仕組みを作る時にも、こうしたペットに関わる支援をその一つに加えることがあっても良いのかもしれない。



動物保護にあたる茨城県の職員の皆さん。



豪雨の被害を受けた常総市の様子
(茨城ペットセレモニー提供)

なりた じゅんぎょう 東京教区玉川組 感応寺住職
昭和50年1月、世田谷大吉寺に生れる。平成13年より感応寺住職
平成22年浄土宗東京教区青年会会長。平成24年東京浄青災害対策委員長
平成26年関東ブロック浄土宗青年会理事長（現職）



小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六十五回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

富豪の社会貢献家アルベル・カーンへの哀訴②



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリアハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。また、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティロカルの存在を知らされ強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号取得して帰国。一人異郷に残された海旭はロイマンから博士号取得を促されたところへ母トナ逝去の悲報で気持ちが悪えかけるが、気鋭の仏教学者ヴァレザと出合い龍樹の『中論』の独語訳を手伝うことで博士論文にも弾みがつき首尾よく博士号を取得。しかし仏門への導きの師・端山海定逝去の報に接し海旭の帰心は消え、宗門からの給付金も打ち切られる。海旭は富豪アルベル・カーンから援助を得るべく、東大教授の姉崎正治に仲介を依頼する書状をしたためるのだった。

篤志家カーンへの仲介を姉崎に

宗門から給付金打ち切りという兵糧攻めにあった渡辺海旭は、窮余の一策を思いつき、東京帝国大学で宗教学を講じる畏友の姉崎嘲風こと正治宛てに手紙を書くことにした。その一策とは、フランスの銀行家で篤志家として知られるアルベル・カーンに関わることだったが、それをどう記すべきか、自身の今後を決する重大なことだけになかなか筆が走らない。海旭は途中でペンをおくと、傍らのビールの栓をぬいて、壺のままぐびりとやった。仕送りを断たれて以来、手元不如意のため好きな酒は断ってきたが、この日ばかりは「気付け葉」が必要だと勝手な理由をつけて買求めてきたのだった。深い息をつくとき、再びペンを持ち直して切先に勢いをこめた。

「実を^{こと}尅^くして之を言へば僕は既に幾回か此事を^{ひそ}提^ひげて老兄の高義に訴へむと考へたる也。而も此の如きは漫に老兄の友誼に押れ俠義を

濫用するの責重きを思ひて常に筆を擱きぬ。然るに今何の不幸や老兄の先づ之を僕に諭すあらむとは思へらく老兄深厚の友情は僕が憫れむべき微願と相感じ相通じたるなきを得むか。願くば下に胸間に藏せしを老兄に呈露せしめん」

海旭は姉崎に何度も「哀訴の文」を書き送ろうとしたが、友情の乱用をおそれて思いとどまってきたところ、僥倖にも逆に姉崎から海旭の企図を付度した書状が届いたという主旨だが、その背後にはこんな事情と経緯があった。

そもそも海旭がカーンのことを知ったのは、留学以来長い付き合いがある医学部の老教授からだった。若き学芸の徒を励ますために大いに私財を散じている度量の広いフランス人篤志家がいる、しかも大の日本蟲貞むしこと聞いて、ぜひとも面識を得たいと思った。さらに東京帝国大学に巨費を献じ、海旭の畏友である姉崎正治ら宗教学者をヨーロッパへ招聘したこ

とを当の姉崎からも聞かされて、カーンへの敬服の念はいや増した。一般に富豪の篤志家というと世俗の役にたつ自然科学や実学には献金をするが、宗教学などには見向きもしないからだ。カーンという人物は、篤志家とは名ばかりの「志の薄い」連中とは大違いだった。

そんなカーンにまつわる「美拳」を知って景仰の情を深くした海旭だったが、やがて宗門から給付金を打ち切られ、衣食の資も底をつきはじめ研究もおぼつかなくなってきた。

海旭はこの地に逗留してすでに八年、要路の交友も数多くでき、その中には資産家も一人二人はいて、これまでに物心両面にわたる後援も受けてきた。しかし、よく知っている関係とはいえ、いやむしろ近しい間柄だからこそ、にわかに首を垂れ膝を屈してあからさまな無心をするのは、母親トナの口癖ではないが「士族の子」の矜持が邪魔をして許さなかった。

と、かねてから聞き及んでいた篤志家のことが想起され、援助を仰ぐ手紙をしたためようと思いついた。しかし一面識もないカーンにいきなり書を呈するのは、いかにも礼を失している。世俗の人ならともかく、自分は僧籍の身であるからだ。そこで、カーンから援助をうけて世界を周遊した姉崎に仲介の労をとってもらうのが一番だとひらめいて、それを実行しようとした矢先、姉崎からカーンの厚情にすぎたかどうかという書状が届いたのであった。この僥倖で窮状から再生できると、海旭の歓喜たるやいかにばかりであったか。

姉崎はその書状の中で「カーン氏に貴僧の研究の目的と帰朝予定を説得力をもって記せ」と助言していた。自らの学究であれば、金の無心とは違って、矜持が妨げるところか矜持がふるいたつだけにペン先に力がこもり、概要を以下のとおり一気に開陳したのだった。

念願の密教研究に取りかかるも…

カーンの奨学金でヨーロッパ遊学の途次ドイツに立ち寄った姉崎と久闊を叙してから一年後、海旭は華嚴諸部のサンスクリット原典と漢訳との対照と共に浩瀚なる両経典の臨写をしておえると、念願の密教仏典の研究をスタートさせた。資料をロンドンのアジア協会とケンブリッジ大学カルカッタ文庫から取り寄せると、まずはこの資料をもとに研究分野を原始密教と成熟密教の二大時期に区分。それぞれの追究の指針を次のように定めた。

第一期の「原始期」については、代表格の『孔雀王経』を柱にすえて四阿含との関係ならびに、古代インドの二大史詩である『マハーバータ』と『ラーマヤナ』との繋がりを討究する。

第二期の「成熟期」については、柱として『空智金剛經』あるいは『如来三業秘密經』のような原本が存在するものを選んで、それと漢

訳諸部による後代の密教とを対照する。(それにしても浄土宗の僧侶が密教の原典にこれほどまでに真摯に立ち向かうとは、まさに既成仏教の再生のためには出自の宗派にとらわれず「原点(原経典)」に還れ」と唱えた八宗の泰斗・福田行誠を生涯の師と仰ぐ渡辺海旭の面目躍如たるものがあつた)

第一の原始密教の研究におよそ一年前から取りかかり、ほぼめどをつけることができた。残るは、ケンブリッジ大学が門外不出として珍藏している二種類の古経典の断片を校訂したカルカッタ文庫本との対比だけである。いよいよ第二の「成熟期」の密教研究へ——と記したところで、海旭のペンがはたと止まった。さて、世俗がからんだ「裏事情」をどこまで記すべきかと。実は、第二期の成熟期密教の研究にかかろうとしたところで、宗門からの仕送りが途絶えたことで資力が尽きたこともあるが、問題はそれだけではなかった。

さすがこれは「士族の子」としては「恥」なので姉崎の書簡には詳述するつもりはないが、研究のために貴重な歴史的資料を求めてやれロンドンだベルリンだパリだとヨーロッパ各地を飛び回り、知己をえた資産家たちの援助に甘えて十マルク、二十マルクと借用していたが、気が付くとそれが結構な金額になつていたのである。仏の世界に身をおく人間が俗塵の世界の人たちに迷惑をかける、これはあつてはならぬことだ。そこで第二期の密教研究を断念、帰国寸前の萩原雲来から借金をして俗塵の世界への不義理をきちんと清算して自分も帰国しようと思つたが、雲来も留学を延長したため「仕送り」を減らされ、とても海旭に貸せる余裕はなかつた。ついに海旭も万策が尽き果てた。膨大に積み上がった負債を即時に返すあてもなく、となればこの地で何か仕事を見つけ、少額ながらも返済していくしかないが、それとても何年かかるかわからない。もちろん頓挫を余儀なくされ

た第二期の密教研究の再開など夢のまた夢であつた。

カーンに巨額の借金を申し込む

海旭は手元不如意に至つたこの行きづまりの「裏事情」についてほんのさわりを記した上で、いよいよカーンに対する「依頼案件」今風にいえば「プレゼンテーション」を具体的に切り出した。いわく――

来月（明治四十一年一月）か三月上旬までにロイマン教授と共同で進めている于^{ウチ}間（現在の新疆にあつた古国）の古文書の研究にめどをつけ、オックスフォード大学のヘルンレ博士（Augustus Frederic Rudolf Hoernle）とインド政庁へ送付すべき報告を書き上げる。そこから前述した第二の成熟期の密教研究の続きに着手するために、ケンブリッジ大学に赴いて二か月ほどを費やして資料を収集・整理。その後ロンドンのアジア協会で働いて、暇をみつけてドーバー海峡をわたつてパリで、

英国にはない密教の謄本を二、三写経して、再びストラスブルクへ戻つたのち、ベルリンで中央アジアから出土した豊富な古經典の断片や古仏像を渉獵・鑑賞して、モスクワ經由で帰京したい。その時期はおおよそ本年の七月上旬となるだろう、と。

帰国をモスクワ經由としたのは、五年前の明治三十八年（一九〇五）にモスクワ鉄道が全線開通、ヨーロッパとアジアが鉄路一本で結ばれることになったからだ。これにより、はるばるインド洋を越えた船旅で二か月を要した往路とはちがつて、帰路はたった十五日で故国へ戻ることができるようになったのである。海旭は続けてペンを走らせた。

「徒に恩恵に甘んじて此資を乞ひ得むことは僕の喜ぶ能はざるなり。僕は実に同氏の義に由りて約五年の年限と極めて低率の利子とを以てこれを恩借せむと欲したる也」

つまり「カーン氏の義にすがつて低利ではあるがあくまでも借りるのだ」と記すと、あ

らかじめ別紙に計算しておいた数字を確認してから、これまで以上にペン先に力をこめて具体的な数字をグイとばかりに記した。

「邦貨金二千五百円あらば足るべしと信ず、即独貨五千馬^{ポンド}仏貨六千法^{フラン}余なり」

これは一介の貧乏留學生が申し入れるにはいささか巨額だった。明治四十年前後の一円は現在の物価に換算するといくらぐらいいにわたるのか。ちなみに「都市部消費者物価指数」でみると昭和十年を1とすると、明治三十八年が〇・五五に対して平成二十二年（二〇一〇）が一七六七。これを一円の価値に換算すると明治三十八年の一円は現在の三千二百十三円。物価指数では抽象的で生活実感がわかないというなら、主食のコメでみると、明治三十八年（一九〇五）の白米十キロ当たりの値段は一円二十銭であったのが平成二十二年（二〇一〇）の中等米のそれは三千四百七十八円で、ここから換算すると明治三十八年の一円は現在の二千九百円にあたる。（いずれ

も総務省統計局の統計データ、角川書店『角川日本史辞典』一九六六、矢野恒太記念会「日本の一〇〇年」による）ということは海旭がカーンに申し入れた邦貨にして二千五百円の「恩借」は、現在の価値にすると物価指数換算で約八百三万円、コメ換算で約七百二十五万円になる。

巨額であるが海旭なりに計算した現実的な金額だった。一番の「かかり」は帰国費用だが、モスクワ鉄道の一等でもベルリン—ウラジオストックは四百四十円で二等ならその半額程度ですむ。カーンに約束した密教研究を半年かけて成し遂げるための生活費もせいぜい月三十から高く見積もっても五十円にすぎない。となると、かなりの部分がこれまでの援助という名の借金の返済用としか考えられない。海旭は金額の提示の後にこう書き添えた。

「僕は極めて節約に就き此中にての残債をも理め帰朝の旅費も此中にて支弁せんとす」

借金をこしらえておいて、「節約」とはよくぞいったものだが、当人はいたって本気だった。酒をのぞけば耐乏生活もいとわれない。だが、研究となると金に糸目はつけない。それが八年間に積もりにつもって大きな負債をつくったのだが、それをいささかも恥じるところがない。やはり渡辺海旭という人物は只者ではなかった。海旭はペンを休めて何やら思案した。机上のビールの残りを飲み干すと、「弁済の方策もしかと示さないと説得力に欠ける」とつぶやき、ペンを取り直した。

——現在自分が宗門から管理を委ねられている東京は深川の西光寺は名刹で、本山と檀家から支給される米穀の収入が年千八百円、これにお布施などの雑収入を加えると年に二千七百円から二千八百円になる。帰国して住職に復して整理を行なえば年に七百から八百円程度の「剰余」をつくるのはそう難しいことではない、と。

ここまであけすけに台所事情を開陳すると

は、いったい海旭はどうなってしまったのかと、おそらく姉崎をおどろかせるであろう。しかし、「士族の子」の矜持から最初は婉曲な書きぶりをしていた海旭であったが、ここに至ってはもはや「士族の子」の矜持はとくに失われていた。海旭はふーっと深いため息をつくとき、学問三昧の自分の中にこんな金銭勘定ができるもう一人の自分がいることに気づいて、苦笑と共につぶやいた。最初は処女のごとく最後は脱兎のごとしか、と。そして、「さて」と自らを励ますように気合いを入れると、仕上げの一行をこう記した。

「謹で種世の生誕を祝す。老兄願くば僕が至深の祝福と慶賀とを受けよ」

子どもを褒められて喜ばぬ親はいないが、これまた海旭らしからぬ技であった。しかし、われながらあざといとは感じなかった。それほど海旭は切羽詰まっていた。いまや渡辺海旭は、思索の人ではなく俗塵の人であった。

(この項つづく)

謹賀新年 月刊浄土通卷900号奉賀
平成二十八年

浄土門主
総本山 知恩院
門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山 百萬遍知恩寺
法主

福原隆善

〒606 825 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院
法主

真野龍海

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

柴田哲彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (一一) 〇六〇三三

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

美作 誕生寺

〒709 3602 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
TEL 〇八六 (七二八) 二一〇二二
FAX 〇八六 (七二八) 二一六二二

浄土宗務総長

豊岡 鐔尔

(学)大乗淑徳学園
理事長

長谷川匡俊

〒174 8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳S.C.中等部高等部

理事長
校長 麻生諦善

大鹿山弘経寺前住職

金田進徳

〒302 0023 茨城県取手市白山二・九・二八

謹賀新年 月刊浄土通卷900号奉賀
平成二十八年

白本尊阿弥陀如来・
家康公念持佛

静岡
宝台院

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貫

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399-4115 胸ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五(八三)二二六〇

清水湊

忠高山
實相寺

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

家康公祖母の旧地

玉桂山
華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区達阪二・八・六九
電話〇六(六七七二)〇四四四

九品阿彌陀如来

浄真寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

定義如来

西方寺

前住職 大江田博導
住職 大江田絃義

謹賀新年 月刊浄土通巻900号奉賀

平成二十八年

岩淵

天王山
正光寺

東京都北区岩淵町三十二、十一

無縁寺

回
向
院

〒130、0036 東京都墨田区両国二、八、十
電話〇三（三六三四）七七七六

古今伝授の寺

天主君山
願成寺

メールマガジン info@ganjoji.com

護念山 称名寺
住職

須藤隆仙

〒040、0055 北海道函館市船見町十八番十四号
電話〇一三八（三三）〇五七四

塩竈市 雲上寺

全日本仏教青年会理事長

東海林良雲

五劫山
愚鈍院

〒984、0051 仙台市若林区新寺三、十二、十七

寿福山 寛慶寺

水科善隆

大吉寺住職

成田昌憲

〒154、0017 世田谷区世田谷四、七、九

謹賀新年 月刊浄土通巻900号奉賀
平成二十八年



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」

住職 飯島英徳

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143) 22 - 4677・44 - 2695

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

願行寺

佐藤成順

〒140 0004 品川区南品川二・一・一二

森巖寺

加藤昌康

〒155 0032 世田谷区代沢三・二七・一

鎌倉大仏殿

高德院

〒248 0016 鎌倉市長谷四・一二・二八
電話 〇四六七 (一一) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (一一) 五〇五一

十八檀林霊場会
吞龍上人縁日(毎月八日)

蓮馨寺

住職 桑原恒久

〒350 0066 川越市連雀町七・一
電話 〇四九 (一一二) 〇〇四三
FAX 〇四九 (一一二) 〇六七六

光円寺住職

佐藤良純

〒112 0002 文京区小石川四・一二・八

光取寺

大室了皓

〒141 0021 東京都品川区上大崎一・五・一〇
電話 〇三 (三四四) 八三八四

浄土誌上句会

●信

〈特選〉
信楽の狸が踊りだす月夜

高崎 在作

信楽は滋賀県の西方部に位置し、この地方で焼かれる陶器の呼び名でもある。茶器のほか、この句にある狸なども特産である。庭に置かれている狸も踊り出しそうな月夜だという。まさに滑稽・おどけの道を行く。

〈佳作〉
前世を少し信じてねこじやらし

桑沢泥舟

富有柿あまき信じて買いにけり

吉崎美和子

海中人褌の信者初日の出

井村善也

●濃

〈特選〉
ひと雨であおさ色濃き粗朶の浦

石原 新

漁村の女性たちは、連れ立ってあおさ摘みにも行ったものだが、この頃は養殖するようになった。この句、日照り続きで困っていた

のが、やつとひと雨あつたという。「色濃き」
がその喜びを受け止めている。

〈佳作〉

大鹿の影や濃霧の滑走路

内藤隼人

紅葉濃し少年隊士自刃の地

斉田 仁

葉牡丹の一際目立つ濃紫

東 保

●自由題

〈特選〉

初参り裏地おしやれなコート着て

増田 信子

正月に土地の氏神に詣でる、あるいはその
年の恵方に当たる社寺に詣でるのだが、この
作者はちよつとおしゃれという姿のようだ。
一張羅を着ていそいそとである。「裏地おし
やれな」が全てを表現している。

〈佳作〉

鯛焼に豊かな腹のありにけり

笠井亜子

なまなま淫祠残れり枯鶏頭

長谷川裕

老医師のカーテン揺らす大きくしやみ

浜口佳春



兼題 成人 自由題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■信

信心の深そうな手が梨を剥く
交信の順を待ちたる月の客
晩秋や青き罫ある頼信紙
黄葉を信書のように手渡しぬ
山茶花はらはら信用金庫日和なり
鯛焼を信者の如く並び買う
どの信号か迷う都心の師走かな

月島恭子
内藤隼人
横山達郎
秋田恵子
長谷川裕
加賀洋一
石原 新

■濃

夕暮れの牛乳の濃さ冬近し
電柱の影の色濃き神の留守
小春日の空に濃淡ありにけり

井口 栞
月島恭子
長谷川裕

締切・二〇一六年一月八日

発表・『浄土』二〇一六年二・三月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

美濃紙の朱印の滲み冬に入る
死化粧の夜長濃いとか薄いとか
桐一葉暮色次第に濃くなりぬ
露寒や昨日より濃い水の色
石段に影濃くなりて十三夜
野の色に濃いも薄いもただありぬ
濃い口のしょう油の色や冬深し

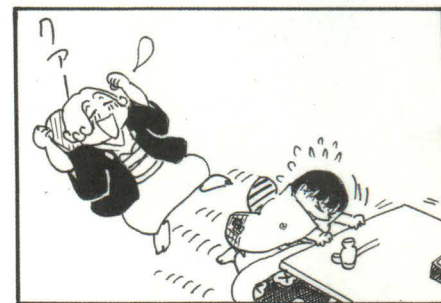
鳥羽 梓
今田重紀
光山真理子
荒井瑞恵
五木美智
風巻俊雄
近藤アツ子

秋気澄む革靴の先とんがって
鯛焼の片身がすこし狐色
青銅の蛇を濡らして片時雨
三寒を耐えて四温は空元氣
颯と上げ爽と湯を切るお燗番
水つ洩なにを言つてもう行の子
鋤焼はずつとむかしの日曜日
波郷の忌一葉の忌を寝て過ごす
狐火の薄く我が身を剥がれけり
大バケツほどの溜息クリスマス
凍蝶と詩人の心理的な距離
三昧と洒落れたり三の西の酒

月島恭子
斉田 仁
内藤隼人
西嶋右近
桐島 勉
宮地 翠
仁科亜由美
富坂泰郎
神坂由美
日野映美
松野琴子
東 千春

さっちゃんね

かまちのひろ



かまちひろ先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)

編集後記

去年今年重き頭で礼拝す

岱潤

いか」と。

第二次大戦後の敗戦処理内閣として登場した東久邇宮首相は、アメリカの国民に向かいラジオ放送を行いました。「アメリカの国民たちよ、パール・ハーバーを忘れてほしい、我々もまた広島・長崎を忘れるから」というものでした。これをアメリカで聴いたある新聞記者はすぐに次のようなコラムを書きました。「アメリカの国民よ、パール・ハーバーを覚えていてほしい、我々もまた広島・長崎を決して忘れないから。そして両者のこの悲惨な記憶を持つてこそ、太平洋に平和の架け橋を作ることが出来るのではな

この話を関田寛雄さんという青山学院大教授で牧師の方から聞きました。何時の時代も日本の政治家の主張は、陳腐で驚きに満ちています。過去と向き合うことは、確かに辛いことだけでも、ごまかしや言い逃れは、何一つ未来への力にはなりません。一昨年は中国南京へ、昨年はタイの泰緬鉄道のクワイ川鉄橋の地カンチャナブリーへ慰霊法要に行つて来ましたが、日本人として両地共厳しい研修でしたが、現地の人々の温かさ、遺族の人々のやさしさに触れ、知ること、伝えることの大事さを確認することが出来た旅でした。「過去を見つめることは苦し

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森巖寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 松濤泰彦(芝・寶松院)
 真野龍海(大本山清浄淨院)
 臈博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 (敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

浄土

八十二巻二月号 頒価六百円
 年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十七年十二月二十日

発行 平成二十八年一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティイー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七)六九四七

FAX 〇三(三五七)八〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二二七

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

い、しかし無知は人類最大の敵である」とは、西欧の何人もの政治家の言葉です。戦後七十一年、そして月刊『浄土』九百号に当たり、第一歩の後記と致します。(長)

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価：12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名()を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価：10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、ご注文をご記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax(03-3578-7036)、メール(hounenn@jodo.ne.jp)、または
ご郵送(105-0011東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

大事なお知らせです

月刊『浄土』通巻900号奉賛 講演と演奏の午後



月刊『浄土』は2016年新年号をもって通巻900号を迎えることとなりました
皆様に愛読されながら
戦前、戦中、戦後。困難な時代を乗り越え発刊し続けてきた稀有な雑誌です



◆講演 西館好子
「法然上人と子守唄——子守唄の原形を探る」

演奏 歌◆川口京子 ピアノ■長谷川美佐子

そこでこのたび日本子守唄協会理事長の西館好子先生をお招きし
日本の子守唄そして童謡や唱歌を育んだ心のふるさと
歌唱とピアノの演奏を交えつつその原形を探り
そのなかで法然上人のお心に触れること
そして
私たちが今もっとも大事にしたい心
それを確認する集いにしたいと思います

◆日 時 平成28年1月26日(火)午後3時~4時30分
◆会 場 大本山増上寺 光摂殿講堂
◆参加費 1000円

※参加ご希望の方は 法然上人鑽仰会まで FAX かお手紙でお申し込みください

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館4階 FAX03-3578-7036

